

---

# 彼女の名前は葉子だった

いち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女の名前は葉子だった

### 【Z-コード】

Z1695E

### 【作者名】

いぢ

### 【あらすじ】

絵美は、親友に「後ろがない」と相談をもちかけられた。親友の身に起きている事態は、日に日に迫つて・・・そして

「後ろがないのよ。」

「後ろが無い?」

「あのね、マリオのゲームにやロックマンでも良こや・・・こロックマンは違つかな

「ゲームの話しつ?」

木漏れ日が温かいを通り越し、モスグリーンのカーティガンを羽織つて来た事を、絵美は悔やみつつアイスティーをストローでぐるりと搔き回す。

深夜、いやあれは明け方だ

宵の明星がきらきらりと輝くなんてレベルじゃない。

既に空が白んでいる頃に、絵美は眼前の親友のメールにより心地良い眠りのラストスパートから、アラーム音とは違う浮かれた着信音によりフィナーレを切つたのだ。

内容は、紛いもなく切羽つまつたもので  
彼女は元来。そう、マドラーを薄く搔き交ぜる爪先の様に  
ごちゃごちゃとメールすらもデコレーションしている。  
しかし、明け方に見たメールは  
何度も短い文面を見直しひどくを得なかつた  
質素な画面には、

件名：Re2・Re2・Re2・Re2・Re2・来月の28つてある

04/16 04:29

本文

えみりんやだこわいたすけて

と言つ一文がまだ、薄暗い室内を陰鬱な空氣と共に照らし出していた。

ただならぬ、事態を予想して彼女のリダイヤルへと指先を急かし慌てて耳に携帯を押し付けたが、通話中を表す電子音を数回聞いただけだった。

十数分間繰り返し、彼女にメールで言伝をすると

私は、睡眠を再開させ、今に至る。

「ちょっとえみりん！聞いてるのぉお？」

彼女の熟れすぎた果実みたいな唇に乗せられた言葉とからんと、アイスティーの氷が鳴つたのは、ほぼ同時だった。生憎、私はあれからレム睡眠に切り替わり睡魔の群れが脳内でクラシックを奏でている。

予断だが睡魔のお陰で今日の授業も散々だった。

「で、マリオをやつて寝不足な訳？」

また、氷がからつと鳴る。

彼女は屈託の無い表情から、刹那、戸惑い、今度は青ざめた。長年の付き合いの彼女が、こんな表情をするなんて

私は自分の記憶を振り起したが、睡魔と共に記憶は眠つてゐるらしい

「えみりん・・・あのね、変なやつって思わないでね?」

「うん?、何よクッパが怖かつたとか?」

彼女はそれでも、躊躇いがちに口を開いた。

「あのね、マリオとかって前には進めるじゃない?」

またマリオかよと、うんざりしながらも私は口を次ぐんでみせる。

「でも、後ろには引き換えないじゃがない?、どんどん画面がこいつ、マリオに迫ってきて前いた場所を削つて削ぎ落とすじゃない・・・私もなの」

そり、言えばそんな、システムも在った様な気もするが、いやに冷えて来た室内に肌を震わせる

「最初はね、ホントに些細な事なのよ、レシートが消えたりとか、口ミが消えたりとか」

それは、あんたが捨てたんでしょ?を私はまた飲み込んだ。

「次にね、高校の同じグループのアコとか、香織とかがね私の存在忘れたのよ・・・覚えて無いって訳じゃないの知らないって・・・」

私の記憶では、アコや香織が彼女と同じグループにいた記憶は無い、ただの勘違いでは無いだろうか

曰く、彼女は自分の過去が消えて行くと言つていた。

曰く、彼女は持ち物であつたり、人の記憶であつたり、全てが現在と共に、ばっさりと切り取られていいくらしい。

曰く、昨夜はバイト先の居酒屋で自分のシフトがまるまる消えていて全てのスタッフにお客様扱いされたらしい

どんどんと、彼女の気付かない内に制限時間は迫つてゐる。  
私たちの想像するより、ずっとずっと早く

私は彼女の前に置かれていた。

お変わり自由の珈琲カップが跡形も無く、消えた事を言えずにいた。

彼女を表す、彼女だと示す名前が思い出せなかつたのだ。  
そして、ふと思ひ出す。

彼女から明け方貰つたメールは  
何故彼女だとわからなかつたのか・・・

部屋が暗かつたから?

いつもの絵文字や、デコレーションがないからか?

私は携帯を開くと、自分の目を疑つた、疑わずにいられなかつた

宛先

件名：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：来月の28つてさあ

04/16 04:29

本文

えみりんやだこわいたすけて

宛先には誰の名前も標示がなかつたのだ。一文字も彼女を示す言葉はない。

すっかり、薄まつたアイスティーを一口飲むと  
目の前にいる、見ず知らずの彼女に会釈をした。

最後迄飲みほすと、女は消えていた。いつの間に消えたのだろうか  
音もなく静かに消えていた。

私が見ず知らずの女の分もお代を払うのかと、ケチ臭い事と至極当然な事を思いつつ店を出た。お代は一人分だった。

空は、向かう所的なしの青空で、何故長時間一人でファミレスにいたのだろうと、冷房で鈍つた体を空に向ける。

ふと、何故か寝不足な頭でマリオを久しぶりにやりたいと思つたが、家につく前にすっかりそんな事を忘れてしまつた。

(後書き)

読んで、いただきありがとうございました。何だか設定と、ラスト  
がわかりづらいような気がしますが、愉しんで頂けたら幸いです。  
彼女の名前は一応、葉子です。全国の葉子さん済みません

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1695e/>

---

彼女の名前は葉子だった

2010年10月28日05時32分発行